

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 18 日現在

機関番号：13802

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22592444

研究課題名(和文) 集学的治療を受ける食道がん患者に対するがんリハビリテーション看護プログラムの構築

研究課題名(英文) Postoperative life reconstruction process of patients who received adjuvant therapy during recovery from esophagectomy.

研究代表者

森 恵子 (MORI, KEIKO)

浜松医科大学・医学部・教授

研究者番号：70325091

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円、(間接経費) 1,080,000円

研究成果の概要(和文)：食道切除術後の回復過程において補助療法を受けた患者の術後生活再構築過程を明らかにする目的で、食道がん治療目的で食道切除術を受け退院後6ヶ月以上経過し、術後補助療法が終了している外来通院中の患者22名である。外来受診時に半構成的面接を行い、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチの手法を用いて分析した。その結果、食道切除術後の回復過程において術後補助療法を受けた患者の術後生活再構築過程は、生活圏の狭小化及び命と引き替えに生活圏の狭小化を受け入れ自分流の暮らし方を獲得するをコアカテゴリーとする過程として説明できた。

研究成果の概要(英文)：The aims of the present study were to clarify post-operative lifestyle restructuring by patients receiving adjuvant therapy during the post-esophagectomy recovery process and to obtain practical nursing suggestions. Subjects comprised 22 outpatients who had completed post-operative adjuvant therapy and who had been discharged from hospital for at least 6 months following esophagectomy for esophageal cancer. Semi-structured interviews were conducted during outpatient visits and data were analyzed using the modified grounded theory approach. Results revealed that the process of post-operative lifestyle restructuring by patients receiving adjuvant therapy during post-esophagectomy recovery could be explained by the core categories of narrowing of sphere of daily life and accepting narrowing of sphere of daily life and acquiring a personalized way of life in exchange for being alive.

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：がん看護学

キーワード：食道がん がんリハビリテーション 生活再構築 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ

1. 研究開始当初の背景

2004年にがん対策基本法が施行されたが、悪性新生物による死亡者数は年々増加傾向にあり、2007年における食道がんによる死亡者数も11,669名と、男女ともに若干増加傾向にある(国民衛生の動向,2009)。一方、診断技術の向上、治療の専門高度化、国民の健康に対する意識の向上等に伴い、がんに対する治療成績は向上したが、治療を終えたのち、治療に伴う様々な障害や、機能低下等を抱えたまま、長期間生存していかざるを得ないがんサバイバーも多い(近藤,2006)。がんサバイバーに対する援助として、損なわれた機能をできる限り罹患前の状態に戻す、あるいは、近づけることを目標としたケアが行われている。

リハビリテーションとは、何らかの原因で、適しくない(望ましくない)状態に陥った時に、そこから救い出して、再び適しい状態に復帰させるという意味を持っており、“権利・名誉・資格の回復”という人間全体の価値または人間の尊厳に関わるような重大な意味を持つ用語である(上田敏,1994)。また、リハビリテーション看護の目標は、健康の回復、維持・増進によって可能な限りの自立と生活の質を向上させることであり、人間の尊厳と、可能性に注目し、変化する力を促進することであると定義される(国際リハビリテーション看護研究会,2006)。米国がん看護協会は、がんリハビリテーションについて、それぞれの環境の中に生きる個々人が、がんによって課せられた限界の中で最高の機能を成し遂げられるよう援助するプロセスであると定義している(1989)。米国においては、がんリハビリテーションプログラムが確立され、治療開始当初より、がんリハビリテーションプログラムを用いた介入が行われており、特に頭頸部がん、乳がん、ストマ造設直腸がん患者に対する cancer rehabilitation に関する研究も多数行われている(Scarpa R.2009, Hsieh CC. et all, 2008, Freeman L. et all,2008等)が、我が国においては、がんリハビリテーションに関する研究は皆無である。したがって、治療成績の向上に伴い増加しているがんサバイバーのQOL向上を目指すには、生活を支援する看護者の視点からがんリハビリテーション看護プログラムを構築することが不可欠である。

食道がんに対する治療の第1選択である食道切除術は、がんの根治性においては優れている半面、手術操作が頸部、胸部、腹部と広域に及ぶため、手術を経験する食道がん患者は身体の形態機能において多様な変化が生じざるを得ない状態におかれる。従って、食道切除術を受けた患者は術後の多様な変化がもたらす様々な不快症状や機能変化を抱えながら、時間をかけてそれらと折り合いをつけ、新たな生活を構築せざるを得ない状況におかれている。

食道がん術後患者が抱える障害、機能低下等に関する様相及び、困難体験への患者の対処法については明らかにされつつある一方で、手術に伴う身体的な侵襲を軽減し、QOLの向上を目指して、手術療法、化学療法、放射線療法を組み合わせた集学的治療が積極的に行われるようになり、治療効果をあげている(La TH et all,2009, Ku GY et all, 2008, 松本ら, 2009)。集学的治療を受ける食道がん患者が体験する症状は複雑多岐に渡っているため、このような患者に対しては、治療開始時から治療後の生活を確立していく全プロセスにおいて、がんリハビリテーション看護プログラムを用いた計画的・継続的な介入が必要である。

2. 研究の目的

本研究の具体的目的は以下の2点である。
目的1.

食道がんのために複合的な治療を受け患者が体験する、日常生活上の影響と、それへの対処法のプロセスについて明らかにし、その結果をもとに、集学的治療を受ける食道がん患者に対するがんリハビリテーション看護プログラムの構築を行う。

目的2.

食道がん疾患のために治療を受ける患者に対する、がんリハビリテーション看護プログラムの構築に対する示唆を得る。

3. 研究の方法

(1)研究期間および研究場所：平成22年4月～平成26年3月末日。中国四国地方のがん診療連携拠点病院をデータ収集フィールドとする。

(2)対象者数の予測：本研究の対象者は以下の条件をすべて満たす、10名とする。

食道がんと診断され、担当医より正確な疾患名、実施されている治療法について伝えられている患者で、1時間程度の面接が可能な心身の状況にある患者。

退院後6ヶ月から1年半が経過している患者。

研究参加への同意が得られた患者。

(3)データ収集方法：研究者が作製したインタビューガイドをもとに、半構成的面接を実施する。

(4)面接内容の逐語訳を質的データとして、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチの手法(木下,1999)を用いて、質的帰納的に分析を行い、集学的治療を受ける食道がん患者に対すがんリハビリテーション看護プログラムを構築する。尚、分析の過程においては、質的研究の専門家より、スーパーバイズを受けるとともに、対象者に分析結果を提示し、分析内容の信用性の確保に努める。

(5)倫理的配慮

自由意思に基づく研究参加であること、参加拒否による不利益のないこと、プライバシーの保護、匿名性の遵守、面接での収集情報は研究目的以外には使用しないことについて、口頭および文書を用いて説明し、十分な

理解を得た後「同意書」への署名を依頼する。患者情報の収集のためのカルテの閲覧、インタビュー内容の録音については、患者から了解を得た上で行う。研究実施に際しては、関係部署の倫理委員会において審査を受ける。

4. 研究成果

本研究の目的は、食道切除術後の回復過程において補助療法を受けた患者の術後生活再構築過程を明らかにし、看護実践への示唆を得ることである。対象は、食道がん治療目的で食道切除術を受け退院後6ヶ月以上経過し、術後補助療法が終了している外来通院中の患者22名である。外来受診時に半構成的面接を行い、修正版グランデッド・セオリー・アプローチの手法を用いて分析した。

分析の結果、食道切除術後の回復過程において術後補助療法を受けた患者の術後生活再構築過程は、生活圏の狭小化及び命と引き替えに生活圏の狭小化を受け入れ自分流の暮らし方を獲得するをコアカテゴリーとする過程として説明できた。この過程は、【予想をはるかに超えて苦痛と化した摂食・嚥下行動】が引き起こす『元には戻りそうにない実感』から始まっていた。この実感を『食べられなくなるのは当たり前』と捉える患者がいる一方で、『食道の手術を受けたことの意義を自問する』ことと『誰にでも起こることかどうか思い迷う』気持ちが交錯するが『食事にまつわる症状を他患と比べる』ことで納得する患者もいた。前者・後者ともにこの段階で『命と引き替え』と言い聞かせ、『今まで通り暮らしていくことの難しさ』に直面しながらも『周囲の期待を回復への糧にする』気持ちで『食べる量を増やすための試行錯誤を重ねる』試みを続けていた。しかし、この試みは術後補助療法により長期化し、これが『失職に伴う経済的困窮への懸念』及び【活動可能範囲の狭まり】をもたらしていた。しかし、患者は、『命と引き替え』と言い聞かせたことを想起し自分の身体状況を客観視することで『時間の経過に伴う回復の実感』及び『摂取可能量増加に伴う回復への期待』が生まれ、『これまでの生活を改め、健康に留意した生活を送る』という新たな価値観を身につけ、『慣れる努力をしつつ自分流の暮らし方を探す』ことで最終的に生活の再構築に至っていた。また、術後に生じた【転移・再発・新たな部位へのがん発症への怯え】が常に患者の心の根幹に存在していた。

このプロセスを促進するためには、生活圏の狭小化を最小限に食い止めるため看護を、長期的、継続的に実施して行くことが必要である。生活圏の狭小化は、摂食機能低下に起因する多様な心身の変化をもたらす結果であり、術後の摂食機能低下とそれが引き起こす生活上の変化、不快症状の内容とそれらの一般的な持続時間などについて、イメージがわくように提示し(予期的心配)、気持ちの準備をしてもらい、同時にこれらへの具体的な対処方法をあらかじめ説明すること(予期的

指導)、および患者個々の自己管理能力をアセスメントし術後介入の見通しを立てることが必要である。術後、摂食機能低下とそれが引き起こす日常生活上の変化および不快症状が現実になった時には、患者個々の詳細な状況に応じた具体的対処方法を専門的知識に基づいて患者と共に考え、実施し、生活圏の狭小化を最少限に食い止めることが重要である。また、外見の変化や下痢については、衣服の工夫、トイレマップの作成・提供、食べる速さなどを指導することも重要であり、看護師が医療チームの中で調整役になり、医師、薬剤師、栄養士、言語聴覚士等の専門性を繋いで援助を提供することは、患者の中に『周囲の期待を回復の糧にする』気持ちや苦痛との交換条件としての「命」ではなく、命への感謝の気持ちを育み、術後生活再構築過程促進要因となりうる考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

1. 森恵子, 秋元典子: 食道切除術後の回復過程において補助療法を受けた患者の術後生活再構築過程, 日本がん看護学会誌 26(1), 22-31, 2012.

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 2 件)

1. 森恵子: リハビリテーション看護の特徴, 雄西智恵美, 秋元典子(編集), がん看護, 南江堂, 東京, 235-239, 2013
2. 森恵子: 食道がんで食道切除術をおよび食道再建術を受けた患者の看護, 雄西智恵美, 秋元典子(編集), がん看護, 南江堂, 東京, 259-262, 2013

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

森 恵子 (MORI, Keiko)
浜松医科大学・医学部・教授
研究者番号：70325091

(2) 研究分担者

秋元 典子 (AKIMOTO, Noriko)
岡山大学・保健学研究科・教授
研究者番号：90290478

雄西 智恵美 (ONISHI, Chiemi)
徳島大学・ヘルスバイオサイエンス研究
部・教授
研究者番号：00134354

(3) 連携研究者

なし